夢追い人列伝
その十三「審判部伝（下）」

初めに

夢追い人列伝その十三は、審判部伝の最終編（下編）である。下編では、第 8 代渡邊博史審判長以降、現在までの 10 年間を振り返る。国内ではマイナースポーツ観が否めなかったバスケットボールだが、ワールドカップやオリンピックへの出場、NBA での日本人選手の活躍などで、近年急激に注目度が高まってきた。山口県にも待望のプロチームが誕生した。審判の世界では、三人制が広く行われるようになり、TOP リーグでは判定にビデオが導入されるなど、変革の波が押し寄せた。そして、ついに山口県からプロフェッショナルレフェリーが誕生した。激動の 10 年であったとも言える。

加えて、「下編」では審判と関わりの深いテーブルオフィシャルズの歴史についても俯瞰する。

なお、「上編」「中編」に続き、審判組織及び組織トップの名称を「審判部」「審判長」に統一し、年度の表記を西暦と和暦の併記で統一していることをお断りしておく。

山口県バスケットボール協会　審判部			
第８代審判長	渡邊　博史	2012(H24)年 4 月～2015(H27)年 3 月	3 年
第９代審判長	有澤　重行	2015(H27)年 4 月～2018(H30)年 3 月	3 年
第 10 代審判長	秋山　厚志	2018(H30)年 4 月～2023(R5)年 3 月	5 年
第 11 代審判長	坂本　幸一	2023(R5)年 4 月～現在	
山口県バスケットボール協会　TO 委員会			
初代委員長	兼重　晃	2018(H30)年 4 月～2022(R4)年 3 月	4 年
第２代委員長	中野　省吾	2022(R4)年 4 月～現在	

第8代　渡邊博史氏（2012(H24)年4月～2015(H27)年3月）

第 7 代審判長の松本隆志氏がバトンを託したのは、中学校教員の渡邊博史氏であった。渡邊氏は、平成 11 年に A 級を取得し、県内にとどまらず、中国ブロックや全国で活躍していた。2013(H25)年には、女子インカレを周南市に迎え、無事に終えた。また、同年に勝原氏、秋山氏と 2 名の A 級審判が生まれ、米村氏が山口県初の女性 AA 級への昇格を果たしている。渡邊氏は、審判長時代を次のように振り返っている。

> 前審判長の松本氏の業績を、山口国体の成功を目指して「畝を作り種を植えた」ことに例えるならば、私の審判長時代は、「水を与え芽を育てる」３年間であった。
>
> 山口国体を終えたすぐあとに審判長を拝命したが、自分の任期は有澤氏にバトンタッチするまでとこころえ、じっくりと人材育成に努めることができた。最先端の情報発信は全国で活躍する有澤氏と松本氏にまかせ、県内審判員の指導に注力した。その際、副審判長の松本理氏と河村正夫氏の存在は、とても心強かった。両氏や各地区審判長のお陰もあり、次代を担う若手の育成や発掘が順調に進み、今日に繋がっている

と実感している。

中国ブロックの審判も、宇田川貴生氏中心の体制から大谷氏（広島県）を中心とした体制に代わり、新しい時代の幕開けであった。２メンシステムから３メンシステムへの移行期で、３メンメカニックスの研修が始まった時期でもあった。

自分自身を振り返ると、ジュニアオリンピックや全中の準決勝、地元開催の女子インカレの最終日のゲームを吹けたことは良い思い出であるが、それ以上に筑波大での長期研修の際に関東ブロックで活動したときに、バスケットボールに対する考え方や感じ方が大きく変わったことが印象深い。これからの若い審判は、外へ出ることを恐れず、自分のレフェリングをアップデートしていってほしい。

第9代　有澤重行氏（2015(H27)年4月～2018(H30)年3月）

2015(H27)年、渡邊氏の後を受けて有澤重行氏が第 9 代審判長となった。有澤氏は地元の山口大学でプレーヤーとして鳴らし、国体でも活躍した。高校教員となり、チームの指導の傍ら、審判も追求していった。そこには、父・弘行氏の影響も大きいに違いない。

有澤審判長の時代、2016(H28)年に柳田雅人氏、2017(H29)年に松本成生氏、山本皓貴氏と、3 名の A 級審判が誕生している。柳田氏は同年に秋山氏とともに S 級へと昇格している。

若くして国際審判員となった有澤氏は、日本協会から高く評価され、中国ブロックの審判長やインターハイの審判責任者などを務めた。2015(H27)年には B リーグがスタートし、それまで以上に全国を飛び回って笛を吹く回数が増えた。多忙を極めることになり、山口県の審判長は 3 年間の短期間に限られた。そして、2023(R5)年 3 月に教職を辞し、同年 8 月にプロフェッショナルレフェリーとして日本協会と契約を結んだ。

有澤氏は、次のように述べている。

2015(H27)年 4 月から 2018(H30)年 3 月まで県審判長を拝命しました。3 年という短い期間でしたが、たくさんのご迷惑やご心配をおかけした記憶ばかりが残っています。一方で周りのサポート無くして重責は果たせなかったと思います。改めて、支えてくださった全ての方に感謝申し上げます。

2023(R5)年より、JBA 公認プロフェッショナルレフェリーとして契約させて頂きました。決断に至るまで、相当の葛藤があったことは確かではありますが、常に時代の先駆者でカッコよかった小池先生、コート内外で面倒を見てくださった隆志さん、このお二人の国際審判員の背中を追いかけてきた私なりに、自分にできる山口県への恩返しとしてこの契約の一因があったと思います。ここまで育てていただいた山口県協会の皆様をはじめとする関係各位に重ねて感謝申し上げます。

歴代国際審判そろい踏み。左から松本氏、小池氏、有澤氏
〔2011年5月 明成高校 vs 山口少年男子選抜（山口高校体育館〕

バスケットボールへの関わり方が多様化し、そしてその多様な関わり方がそれぞれ評価される時代に突入

しています。JBA 理念である「バスケで日本を元気に！」のもと、私も微力ながら審判のフィールドで貢献できたらと思います。

ちなみに有澤審判長時代の 2016(H28)年に県協会が法人化された。同じ年に審判のライセンス制度が改定され、それまで県公認と日本公認に分かれていた公認審判制度が日本公認に一本化された。

第10代　秋山厚志氏（2018(H30)年4月～2023(R5)年3月）

2018(H30)年、有澤氏の後を受けて、S 級になったばかりの秋山厚志氏が第 10 代審判長となった。秋山氏は、高校卒業後クラブチームに入り、選手として、またスタッフとして国体成年男子で活躍した。審判活動に本格的にとり組んだのは、プレーヤーとしての一線を退いた 32 才の頃である。審判長になった 2018(H30)年に、山口全中が行われた。有澤審判長の時代に始まった審判の養成を、秋山氏がしめくくった格好である。山口県からは 26 名の審判が参加した。

秋山審判長の時代、2018(H30)年に野口祥寛氏、2022(R4)年に坂本幸一氏と三好浩平氏の 3 名が A 級に昇格している。また、2021(R3)年に山口ペイトリオッツ（現・パッツファイブ）が B3 に参入した。秋山氏と野口氏がホームゲームの審判を担当している。

秋山氏も有澤氏に続き、中国ブロックの審判長を務め、また S 級審判として全国各地で笛を吹いた。そして、2023(R5)年に現審判長の坂本幸一氏にバトンタッチしている。

秋山氏は、次のように述べている。

私が審判を始めたきっかけは、山口県への恩返しです。選手時代にたくさんの方々にお世話になり今の私があります。バスケットボールでは色々な関わり方がある中で、指導の道か審判の道か迷っていた時期、私の尊敬する有澤重行氏より「一緒に山口県に恩返しをしよう」と言っていただきました。今でもその言葉を忘れず日々研鑽に励んでいます。

私が有澤氏から審判長のバトンを受けた年に、山口全中が行われたわけですが、右も左もわからない中、周りの方々にたくさん支えていただいたことや自分自身の審判より、「無事に大会が終わってください」とばかり考えていたことを記憶しています。

今はバスケットボールが盛り上がる中で、審判を志す若い方も増えています。私自身、審判としての研鑽はもちろんですが、今まで歴代の諸先輩方が築き上げてくださったものをこれからも私なりに伝えていければと思っています。

〔2022年香川インターハイ〕左から有澤氏（大会審判長）、小坂氏（TO指導）、秋山氏（男子決勝審判）

第11代　坂本幸一氏（2023(R5)年4月～）

秋山氏に審判部を託された坂本氏は、社会人連盟（旧クラブ連盟）出身である。プレー

ヤー時代には秋山氏ともマッチアップした間柄である。怪我でプレーができなくなったことをきっかけに審判を始め、めきめきと上達し、2022(R4)年にA級に昇格を果たした。

坂本氏は、プレーヤー時代にある審判からゲーム中に「ちゃんと見てるよ」と話しかけられたことを強烈に記憶しているという。当時はわからなかったが、それが有澤重行氏だったことを後に知った。

2023(R5)年、秋山氏が中国ブロックの審判長に着任するタイミングに、坂本氏は県審判長を引き継いだ。氏は、審判長としての決意を次のように述べている。今後の奮闘に期待したい。

これまでの審判長は、県内をまとめると同時に、トップリーグにも従事してこられました。その偉業には改めて驚かされます。自分にはその真似はできないが、逆に県内審判とふれあう機会を多く作ることができます。大会の大小にかかわらずできるだけ参加する機会を増やし、審判の魅力を共有して、審判の輪を少しでも広げることにつなげていければと思います。

テーブルオフィシャルズ

審判部伝の最後に、審判と関わりの深いテーブルオフィシャルズ（以下、TO と表す）についても足跡をたどっておきたい。

近年、プレーのハイレベル化と各種機材の進化により、TO の専門性は著しく高まっている。日本協会は 2021(R3)年に TO 委員会を設立し、TO の育成や技術向上への本格的な取組を開始したが、山口県では日本協会に先んじて 2016(H28)年に TO 委員会が立ち上げられた。実は、TO 普及に向けた活動は、もっと早くに始められている。

2006(H18)年刊行の「夢を追う　山口県バスケットボール協会 60 年のあゆみ」（以下、「夢を追う」）には、「昭和 60 年代に小坂祐三氏を中心に『オフィシャルメカニックス』が開発されたことの意義はことのほか大きい。」と記されており、山口県ではこの頃から TO 普及への取組が始まったことがうかがえる。TO は、その重要性にも関わらず長い間「添え物」的に扱われ、ないがしろにされてきた感が否めない。そこに光を当てた小坂氏の功績は、決して小さくない。

オフィシャルメカニックス

「オフィシャルメカニックス」は、山口県版 TO マニュアルの名称である。高校教員だった小坂氏が、生徒のために競技規則のコピーを切り貼りして手書きのメモを書き加えて作ったプリントが始まりである。資料は毎年更新を重ね、次第に中身が充実していき、数枚のプリントから十数ページの冊子へと成長していった。この資料に「オフィシャルメカニックス」と命名したのは、第 5 代審判長の小池正夫氏である。（審判の動き方マニュアルと紛らわしいため、後に「テーブルオフィシャルズメカニックス」と改名された。）県内ではこの資料を活用して各地で講習が行われ、技術向上と TO の重要性の周知が図られた。

YBA

TABLE OFFICIALS MECHANICS

～より信頼されるテーブルオフィシャルズのために～

2020年10月（暫定版）
（2020競技規則・スコアシート対応）

一般社団法人山口県バスケットボール協会 TO委員会

はじめに

テーブルオフィシャルズは、審判とともに、バスケットボールのゲームを公正かつ円滑に進行させる役割を担っている。プレーヤーが縦横に交代する中で多くの得点が積み上がり、また、秒単位（ときにはコンマ1秒単位）の時間で制御されるなどの特性をもつバスケットボールのゲームにおいて、テーブルオフィシャルズの役割は、とても重要であり、また、やりがいのある仕事である。テーブルオフィシャルズの役割を十分に果たして無事にゲームを終えることができたとき、あなたは、他の仲間とともに大きな喜びと充実感を得ることができるであろう。

優れたテーブルオフィシャルズになるために、特別な能力は必要ない。必要なものは、「正しい知識」「豊かな経験」「高い責任感」であり、そして何よりも、それらを得ようとする「強い意欲」である。

当委員会は、ひとりでも多くの人がテーブルオフィシャルズの重要性とやりがいを理解し、信頼されるメンバーとなることを願ってこの冊子を作成した。テーブルオフィシャルズに関する「知識」を獲得するためには大いに力になるものと信じる。知識を得る中で「責任感」も培われることを期待し、そのよって多くの「経験」が積み重ねられることを願うものである。

なお、この冊子の内容は、公益財団法人日本バスケットボール協会発行「２０２０　バスケットボール競技規則」に基づいている。テーブルオフィシャルズの仕事に関するより詳細な内容については、それらを参照されたい。

目　次

1.　テーブルオフィシャルズ全体 …… 1
2.　スコアラーの任務（スコアシートの記入） …… 3
3.　スコアラーの任務（審判への合図・連絡） …… 7
4.　アシスタントスコアラーの任務 …… 9
5.　タイマーの任務 …… 10
6.　ショットクロックオペレーターの任務 …… 11
7.　ファウルの記録の仕方（特別な場合） …… 14
8.　TOに関係する主なルール変更点（2019 新ルール） …… 15

※　この冊子は（一社）山口県バスケットボール協会サイト（http://yamaguchibasketball.com/）からダウンロードできます。
※　内容についてお気付きの点がありましたら、山口県バスケット協会事務局（yabba@gco.jp）までご連絡下さい。

TABLE OFFICIAL MECHANICS 最終版

小池氏は「山口県にはこんな資料を作っている若者がいます」と、オフィシャルメカニックスを中央の TO 指導者に送った。すると、「よくまとまった立派な資料ですが」の言葉とともに、誤りや問題点を指摘するていねいな返事が返ってきた。それをもらった小坂氏は、さっそく改訂にとりかかった。小坂氏は「最初は競技規則を我流で解釈して作っていたが、小池先生のおかげで中央からアドバイスをもらえるようになり、とても心強かった。」と語っている。その後も、日本協会と太いパイプを持つ松本氏や有澤氏を通して中央の TO 指導者とのコンタクトは継続され、競技規則改正に合わせてオフィシャルメカニックスも更新される体制が整っていった。

インターネットの時代になり、オフィシャルメカニックスが山口県バスケットボール協会ホームページで公開されると、瞬く間に全国に広まり、各地で活用されて絶賛された。全国的に見ても、オフィシャルメカニックスは TO にとって画期的な資料であった。

2021(R3)年、日本協会に TO 委員会が作られた年の 7 月に日本協会版「TO マニュアル簡易版（現・TO マニュアルハンドブック）」が刊行された。これをもって、山口県版マニュアル「オフィシャルメカニックス」はその使命を終えた。

その日本協会版マニュアルには、山口県版マニュアルの図版や文章を踏襲した箇所が随所に見られた。例えば、日本協会版の第 1 章「はじめに」にある次の一文は、ほぼ山口県版からの引き写しである。

> **テーブルオフィシャルズは、抜群の身体能力も運動神経も必要としない。プレーの経験がなくてもよい。必要なものは、「正しい知識」「責任感」「豊かな経験」、そしてそれらを得ようとする意欲である。**
>
> **ー　TO マニュアルハンドブック　「第 1 章　はじめに」より　ー**

それもそのはずで、実は小坂氏が日本協会 TO 委員に抜擢され、日本協会版マニュアルの執筆に関わっていたのである。山口県の TO スピリットは、全国で共有されることになった。ちなみに、全国で活用されているスコアシート印字ツール（複写式の公式スコアシートにドットインパクトプリンターで選手氏名等を印字するアプリケーション）も、山口県協会で開発されたものである。

山口県TO委員会

2015(H27)年に、審判委員会の内部組織ではあるが、山口県 TO 委員会が作られた。2016(H28)年と 2017(H29)年の正月には、オールジャパン（東京）の TO 研修に山口県チームが参加し、2018(H30)年山口全中に向けて本格的な活動がスタートした。

TO 委員長には高校教員の兼重晃氏が就いた。兼重氏は、以前から審判活動と並行して TO 育成に力を入れており、審判部の中で TO 業務のとりまとめ役であった。TO 用の大音量ブザーを自作したり、スコアシート印字ツールの開発に関わるなど、ハード面での貢献も大きい。兼重氏は、当時のことを次のように振り返っている。

> **2015(H27)年、有澤審判長の命を受け、審判部内に TO 委員会を立ちあげた。早速、審判委員会を参考にしながら、TO 委員会組織の基盤作りに取りかかった。中野章吾氏、中野龍一氏、斉藤晋氏、重政由佳里氏、小坂祐三氏などが中心メンバーとしてよく動いてくれ、スムーズな船出とすることができたと感じている。彼らの献身ぶりには感謝しかない。**

2018(H30)年には、全中、ミニ国体、オールジャパン 1 次ラウンドと、大きな大会が続いたが、カテゴリーの枠を越えた協力体制で無事に終えることができた。組織が軌道に乗ってきたことを実感することができた。

2019(R1)年、山口県 TO 委員会は審判委員会から完全に独立した組織となり、兼重氏が正式に初代委員長となった。その後、2021(R3)年に日本協会内に TO 委員会が組織され、山口県 TO 委員会はその傘下に加わった。

2021(R3)年に山口ペイトリオッツ（現・山口パッツファイブ）B3 リーグ参入が決まり、兼重氏は前年から TO クルーやスタッツ（公式記録員）の育成にとりかかった。しかしコロナ禍で活動が思うに任せず、育成は困難を極めた。ぶっつけ本番に近い形でシーズンに突入したが、トップリーグ担当の重政氏を中心に皆が頑張り、ホームゲーム 28 試合の TO とスタッツを大過なくこなしてシーズンを終えることができた。兼重氏は、胸をなで下ろした。

2022(R4)年、兼重氏は、委員長のバトンを中野章吾氏に渡した。中野氏は、旧クラブ連盟の審判であったが、連盟の TO 担当に指名されたことをきっかけに本格的に TO に取り組み始めた。指導しているミニバスのチームにも TO の大切さを説いている。

令和 5 年からは、TO にもライセンス制度が導入された。トップリーグ（B3,W リーグ）や県総合選手権決勝の TO には、B 級ライセンス取得者があたっている。特筆すべきは、FIBA 公認の TO ライセンスを取得している重政由佳里氏である。今後、国際ゲームでの活躍が期待される。

これから、山口県 TO 委員会には、アンダーカテゴリーを中心とした正しい TO の普及と、トップレベルの TO クルーの育成が求められている。第 2 代 TO 委員長の中野章吾氏は、今後を見据えて次のように述べている。

小坂氏や兼重氏が山口県版マニュアルの作成や教育活動を地道に重ね、TO の啓蒙活動の道筋を作ってくださったことは感謝に堪えない。現在は、TO インストラクターと B 級 TO の資格が創設され、TO マニュアルハンドブックの刊行、さらには基礎教育用の e ラーニング開始など、アンダーカテゴリーからトップレベルに至るまで、全国的に統一された TO の育成環境が整ってきている。先人の拓いた普及・啓蒙の道をしっかりと歩み、TO 委員長として県内の TO のレベルを上げて、より多くの B 級 TO 資格取得者の育成に努めたい。

なお、山口県 TO 委員会設立以前にも、広島アジア大会に 2 つの TO チーム参加（1994(H6)年）、全日本総合選手権（東京）での 3 年連続の TO 研修（1999(H11)年～2001(H13)年）、そして 2011(H23)年山口国体の TO 育成など、TO に関わる活動はあったが、これらはまだ審判部の活動の一環であったと捉えるべきであろう。活動の中心は全員当時の日本公認審判（現・B 級公認審判）であった。

終わりに

「夢を追う」の中に、第 5 代審判長の小池正夫氏の寄稿文がある。「山口県から世界へ」と題された短い文章の中で、小池氏は二つの夢を語っている。一つは、「いつか山口

（=地方）の審判員から世界の頂点へ飛躍すること」、もう一つは、「一人でも優秀な審判員を育成し、自分を育てていただいた山口県バスケットボール界に『恩返し』をすること」である。

小池氏は、「世界のコイケ」として海外でも活躍し、北京ユニバ決勝の笛で有終の美を飾った。そして、二人の国際審判をはじめ、優秀な後進を数多く育てた。夢追い人・小池正夫は、追いかけていた二つの夢をともに掴んだのである。

そして、その夢は、後に続く者にとっては「夢」というよりはむしろ「目標」となり、引き継がれている。松本隆志氏しかり、有澤重行氏しかりであり、彼らに続く人たちも同じ目標を追いかけている。

これからの若い審判や TO の前には、無限の可能性が広がっている。今は遠くにぼんやり見えるだけかもしれないが、先人の目指してきた目標に向かって精進することを望んでやまない。

［文責：顕彰事業委員会］

【コラム】審判のユニフォーム

現在の審判のユニフォームは、グレー無地のシャツであるが、かつては、アメリカンフットボールなどの審判と同じストライプ柄のシャツであった。

1981-1984 版の競技規則には、審判のユニフォームは「レフェリー・シャツまたはプルオーバー、グレイの長ズボン、バスケットシューズまたはレフェリー・シューズ」と記載されている。わざわざ「シャツまたはプルオーバー」と書かれているところを見ると、「レフェリー・シャツ」とは、頭からかぶるプルオーバースタイルではない、前がボタン全開のカッターシャツスタイルのストライプ柄のシャツを指すと思われる。今でも、Ｖネックの T シャツスタイルのユニフォームを「レフェリー・カッター」と呼ぶことがあるが、どうやらルーツはこの辺りにありそうである。

ちなみに「カッターシャツ」は、元々は日本のスポーツメーカーがつけた商品名で、「勝ったー」に由来する造語だそうである。

その後の審判のユニフォームは、以下のように変遷し、今日に至っている。

1981-1984（S56-S59）	上：ストライプ柄	下：グレイ
1985-1990（S60-H2）	上：ストライプ柄	下：ブラック
1991-1994（H3-H6）	上：グレイ	下：グレイ
1995-現在（H7-　）	上：グレイ	下：ブラック

「上:ストライプ柄 下:グレイ」のユニフォーム